

経営と健康

第2回

六十二万石の安泰「伊達政宗堪忍袋」

講談師 一龍斎貞花



「伊達政宗殿が、参勤交代で江戸へ出府なされる。ご馳走してあげよう」と、老中筆頭土井大炊頭利勝の招き。

接待役を申しつかったのが、大名と仲の悪い旗本連中ですから大変、

「政宗をなぐつた者を、一番偉いとしてもなそう」

「よし、俺が二つは必ずなぐつてみせるから、二日ご馳走しろ」

と乗り出したのが、旗本仲間でも乱暴者と異名を取りました兼松又四郎。

政宗公、大炊頭のお屋敷へ。

お廊下には薄縁が敷かれ、水野十郎左衛門以下旗本連中ずらりと平伏してお出迎え。その中に兼松顔色が青ざめている。これから飛び出して政宗をなぐるというのだが、それにはそれだけの理由がなければいけない。どうしたらよからうかと考えているその前を、政宗が大刀を下げて通ろ

うとする。ここぞと兼松下げていた頭を、刀の鐙にこつんと当てた。

「ハテ、なにか当たったものがあるが」と思ったが、政宗そのまま行きすぎようとする。兼松、政宗の前へ手を広げて仁王立ち。

「アイヤ、お待ち願いたい。今あなたは、大刀の鐙で某の頭をお打ちなされた。挨拶はあつてしかるべき。礼は欠かさざるものなり。なんとかご挨拶なされよ」

言うや、パンパンと二つなぐつた。「サア、二日ご馳走だ」

なぐられたんですから「無礼者」とお手討ちになるかと思いきや、なんにもおつしやらない。左の眼からポロポロと涙をこぼし、そのままツウーツウーと奥へ。驚いたのが先導しておりました大炊頭。招いた自分が知っているだけだでは済まされない。

「ここは、知らん顔していこう」

いつの時代でも、上の人は都合が悪くないことがあると、「知りません、存じません、記憶にありません」で通そうとする。去年からも続いていますね。

やがて大広間へ。正面に政宗と大炊頭、左右に旗本連中が居並び、これからお酒盛り。庭先で旗本が余興を、剣術、柔術、角力を取る。

頭を打たれたんですから、さぞご機嫌が悪いだろうと、大炊頭が心配していると、政宗ニコニコと大層ご機嫌がいい。大炊頭ホっとしておりますと、大盆を傾けていた政宗が、

「大炊殿、今日はえらくご馳走に預かり誠にかたじけない。ところで右から三番目に坐っておられる人は、なんといわれるな」

言われて見ると、これが兼松だ。「兼松又四郎と、申します」

「左様か、これ兼松とやら、苦しうない近う」

「ほうれおいでなすつたぞ、ただすむ分は無いと思っていた。エエイ突くなど、斬るなど勝手にせい」

流石剛気の旗本、腹をすえて、「へへ」と、御前へ。

政宗 曾我の論し

「最前廊下通行の際、余の横面を打ちしは、その方であったな」

「ハッ、左様で」

「打ちくれし返礼として、余が舞を一差舞つて見せようぞ」

「矢張り旗本が怖いのだな……。ハッ有難き幸せ」

「数有る舞の中で、余が最も好むのが曾我じゃ、曾我を舞つて見せよう」

「是非、拝見を」
「ウム、じゃが若年の折習い覚えし

お能ゆえ、筋が違うと舞にくい。筋を正して舞って見せよう。

曾我の事の起りは、安元二年赤沢山の帰る際、主人工藤祐経の命を受けた近江小藤太、八幡三郎の遠矢にかかって相果てしは、坂東一の武者と異名を取った河津三郎祐泰であったな。

これ兼松、間違いしところあらば、遠慮なく正してくれよ、どうじゃ

「ハッ、間違いしところ、ございません」

「ウム、祐泰の忘れ形見、兄が一萬、弟が箱王。兄の一萬は、曾我太郎祐信が烏帽子親にて曾我十郎祐成、弟の箱王は、北条時政が烏帽子親にて曾我五郎時致となったそうじゃな。これ兼松、間違いしところあらば教えくれよ、どうじゃ」

「それに相違ございません」

「兄弟は、十八年の間艱難苦勞の末、建久四年五月雨の八日、源頼朝が富士の裾野で大巻き狩り、この時工藤祐経の狩屋に忍び込み、首尾よく祐経を討つて目出度く仇討ち、本懐を遂げたそうじゃな。どうじゃ兼松」

「ハッ、相違ございません」

「兄の十郎は、仁田四郎忠常の刃に

かかって落命なし。弟の五郎は、おのれお祖父様（伊藤祐親）の仇、頼朝に

一太刀報わんものと、頼朝の狩屋に荒れ込んだ。廊下を行かんとした時、薄紅梅の被をかぶって震えている者があ

る。薄紅梅は女子でなければ被らぬもの。女・子供に手を掛けるような時致ではない。被をかなぐり捨て、時致

やらじと引つ組んだ者がある。おのれ女子とみせて卑怯な奴、何者ならんと

上帯取つてズルズルッと引き寄せ、つくづくうち見れば髪を唐輪に取り上げし五郎丸季重、取つて押えるは安けれど、宵に松明の灯りが消えた時貸してくれた恩がある。本懐遂げし今は思い残すことなし。五郎丸に手柄させんものと身に縄目の辱し目を受けたそうじゃな。どうじゃ兼松」

「ハッ、相違ございません」

「翌朝、頼朝の君前に引き据えられた時、祐経の忘れ形見十一歳の犬坊丸のおのれ父の仇よと中啓にて丁丁発止の続け打ち。打たれし時、アア汝は果報いみじき奴、昨夜討たれし仇を今朝早討つか。我ら兄弟は十八年の艱難辛苦の末、昨夜ようやく仇を討つたぞ、打つて腹が治るならば打てや犬坊、叩

けや犬坊と言つて打たれたそうじゃ。今の世に至るまで荒人神と謳われる時致が十一歳の少年に打たれる筈がな

い。身に縄の縛めあればこそじゃ。この政宗も、見に縄目こそ無けれど

も、江戸、国かけて多くの家来がある。身に縛めあるも同じことじゃ。そちに

打たれても手が出せん。ハッハハハ、これ兼松、舞いはもうやめじゃ、その代りそちにこれを仕わす」

お側にありました波平行安の名刀を「ハハッ」

受け取りながら兼松、政宗の目を見てブルブルとふるえた。五尺に足らぬ政宗の身体が一丈以上に見えた。

兼松面目ないこと。二日位のご馳走じゃとても割に合いません。

秀吉の小田原攻めの時、天下の名城秀吉でも落とせまいと高をくくつていたが、落城寸前慌てて駆けつけ、この時死を覚悟していますと切腹覚悟の白装束姿。秀吉から遅参許されます。陰では、徳川家康、前田利家という実力者に贈り物をして気脈を通じる周到さ。会津の城主として乗り込んできた蒲生氏郷を失脚させようと一揆煽動。

この密書が秀吉の手に入り呼び出されるや、死罪覚悟していますと十字架を押し立て大坂へ。奇抜好みの秀吉「面白い奴」と許します。相手の性格を把握の政宗。海外交易に力を入れ、家臣

支倉常長をローマ法王に派遣する進取の精神。もつともこれはイザの時、援軍となつてもらうとか、ローマへ逃げるためだったとも、なかなかの知略化。

鷹狩りは勿論、和歌、茶の湯、能を好みデザインーとしても一流。仙台城内に味噌蔵、酒蔵を設け、家督を譲つた後も、家存続のため幕府の重役

を度々招き、自ら料理の献立を決めて接待。そのため酒の飲み過ぎ、ご馳走

の食べ過ぎで喉頭癌になり七十歳で死去。家存続のため命を縮めたのです。もしあの時兼松を手討ちにしたならば旗本と確執を生じ、幕府が外様大名

を取り潰そうとしていた当時のこと、政宗は半地国替えにでもなったことでしょう。今年には政宗の生誕四五〇年。剛毅な政宗といえど、家の安泰には苦

労したのです。

政宗の堪忍よく伊達家六十二万石を泰山富嶽の易きに治めたという、数ある逸話の内より、政宗堪忍袋の一席。